

平成26年度木造建築技術先導事業の応募概要 及び同事業評価委員会の講評について

平成26年度木造建築技術先導事業における応募の状況及び「木造建築技術先導事業評価委員会」において出された全体講評は下記のとおりです。

記

1. 応募状況

本事業の補助対象となる事業として、「建築物の木造化」(以下「木造化」という。)及び「建築物の内装・外装の木質化」(以下「木質化」という。)の2種類を設け、平成26年4月18日から5月26日までの期間で公募を行ったところ、8件(全て木造化(うち1件は提案者側の都合により途中取り下げ))の応募があった。

2. 評価の経緯

評価は、一般社団法人木を活かす建築推進協議会に設置した、学識経験者からなる「木造建築技術先導事業評価委員会」(以下「評価委員会」という。)において、以下の手順で実施した。

まず、応募のあった各提案の内容について、要件への適合、構造・防火面における技術の先導性、建築生産システムについての先導性、一般への普及・啓発効果等の観点から、書類審査を行った。

その結果、内容について詳細な追加情報が必要とされた提案については、さらに当該提案者に対するヒアリング審査を行い、本事業による支援対象として適切と思われる提案を選定した。

3. 評価結果

上記2の評価により、本事業による支援対象として適切と判断した3件のプロジェクトは、別紙1及び別紙2のとおりである。

4. 全体講評

今回の応募では、中層の建築物の提案が複数見られた。構造面においては、未だ建設事例のない新しい構法や国内で初採用となる海外のシステムを取り入れたものがあった。防火面では、新規開発の耐火部材(柱・梁)を採用するもの、新規に認定取得する木質外装の耐火外壁を用いるものなどがあった。また、材料面においては、地場産材を活用するもの、一般流通材で長スパンを実現するものなど、地域振興、木材利用促進に積極的に取り組む計画が見られた。今回の提案は全て木造化の申請であったが、木造化に併せて積極的な内外装の木質化を図る計画も多数見られた。

その中で、採択相当とされたプロジェクトについては、木造化・木質化についての必要な検討がなされており、構造、防火、生産、施工等の面での工夫なども見られ、先導的な木造建築物として波及・普及効果が期待できるものであった。(案件ごとの講評については、別紙参照。)

一方、今回採択相当と認められなかった提案の中には、木材を積極的に活用しようとする姿勢は見られるものの、計画が具体性に欠けるものや先導性が見られないものもあった。

5. 評価のポイント

本事業の評価のポイントとして以下の項目が挙げられる。今後の提案内容の検討に際しての参考とされたい。

(1) 構造、防火面における先導性等について

構造面(例: 構造部材、接合方法又は既存の構造方法の組合せ)や防火面(例: 燃えしろ設計、

(参考)

耐火部材の使用等)において先導性を有するとともに、それらの技術の実現に支障がないと判断されるものであること。

(2) 建築生産システムにおける先導性等について

効率的な生産方法や施工方法の導入など、生産面で先導性に優れた技術等が導入される事業計画であること。また、コスト面で課題となる木材料の調達等について工夫が見られること。

(3) 技術等の普及可能性について

上記(1)及び(2)の先導的な技術等が、公開できるもの又は第三者が当該技術の考え方等を応用して類似の設計を行うことが可能なものであること。

(4) その他の評価ポイントについて

上記(1)から(3)に加え、用途、規模、立地条件等による話題性・普及性、国産材の積極的な活用の提案があれば、評価の対象となる。

また、優先的に評価するポイントとして、過去の採択事例が少ない、①内装の木質化、②外装の木質化、及び③中高層建築物の木造化、の3項目に関する提案について、一定の加点評価を行う。

(参考)平成26年度木造建築技術先導事業評価委員会／委員名簿

委員長	大橋 好光	東京都市大学／工学部建築学科教授
委員	五十田 博	京都大学／生存圏研究所教授
委員	腰原 幹雄	東京大学／生産技術研究所教授
委員	長谷見雄二	早稲田大学／理工学術院教授
委員	萩原 一郎	(独)建築研究所／防火研究グループ長
委員	林 知行	秋田県立大学／木材高度加工研究所教授

(敬称略。委員については、50音順)